

# 資料

——アチック・ミュージアムの刊行物から——

# 沖永良部島の印象

岩倉市郎

こちらは如何に暑いと云つても毎日南風が吹いて七月十一日の九〇度を最高に八七・八度を越しませんので誠に凌ぎ良く存じます。

さて其後の概況を簡単にご報告いたします。

沖永良部島の採集は意外に永くなり壹ヶ月に亘りました。昔話の方は予定以上の収穫がありました。量的には僅々一七〇話にすぎませんでしたが質的には可なり優れたものを聴くことが出来ました。私は今まで空想してゐた所謂第一期昔話に接した感が致しました。話の種は内地の場合と大差ありませんが伝承形式が非常に古風で文学的でありました。尤も之は此島が特に古型を現存してゐたまでのことで内地にも嘗つては然うした形で伝承されてゐたのかも知れませんが兎に角今の世で優れた話者に遭遇することは珍しく難有いことに思はれました。

民俗採集の方は渡島当初に写真撮影を封じられましたので全く意気消沈してしまひました。しかし大島憲兵隊には諒解を得たことでもありますし私にも期する所がありましたし断然二ダース撮りました。家屋の形式は南島一圓に亘つて総合比較の必要を痛感いたしました。これは今後の興味ある課題となるでせう。

喜界島の一丈三尺柱屋は多分に鹿児島の影響を受けて居ります。永良部では此形式の家を「タヌキ屋」(タル木屋)と称して居りますが極めて稀にしか見受けませんでした。たゞし間取りは全く変つて居ります。概して沖永良部島は屋敷が狭く家も小さくあります。家の形式からしますと南方特有の形式は南に下るほど濃厚のやうな気が致しました。頭上運搬なども、其一例かと思ひます。彼島で女が物を背中に負ふのを見たことはありません。

漁業に就ては詳しく調べる機がありませんでしたが例へば喜界島の如き海の忌詞など全く聞かれず漁業の種類も少く規模も小さい様に思はれました。

それから永良部にはユタが非常に多く居ります。一般の信仰も強いらしく盛に利用されて居ります。私の疑問にしてゐた点なども大分教へられる所がありました。

彼島で特に気を引かれたのは農業に精励なこと道路の良いこと松の多いこと、美しい鳥やホタルの居ること石垣の積み方の巧なこと等でありました。(八月六日着)

(「アチックマンズリー」第十四号一九三六年 八月三十日刊 所収)

※文中一行目の「九〇度」とはカ氏の表示であろう。セ氏で32.2度に相当する。

# 喜界島を訪ねて

濱田國義

「帰郷のついでに喜界島の岩倉君を見て来る様に」との先生の御言葉だつたので八月十九日宇検の人々に別れを告げた私は喜界に岩倉さんを訪問すべく二十一日午前十一時名瀬発、五島丸（八〇噸）船上の人となる。同じ郡内でありながら二十余年間の田舎生活に於て唯の一度も行き得なかつた憧れの島を、かうした機会に見る事が出来ると思へば嬉しかつた。時化模様の海上に苦しい船たびの四五時間が過ぎて四時半頃喜界島へ着く。船の着いた湾と岩倉さんの阿伝とは三里も離れて居たが、昨日の電報で岩倉さんは助手一名を連れてわざわざ昨夜泊りがけで出迎へに来て居られた。アチツクに居られる頃から皆が心配して居た岩倉さんの身体は丸で見違へるほど健康になり真黒に焼けた皮膚の色など流石にその活躍振りが察せられ、「島へ来てからは精力があり過ぎて困る」との話でも非常な心強さを覚えた。

改めて助手の拵嘉一郎君にも紹介され、五時間半自動車で一路阿伝へ急ぐ。内地の何処にも見られない県道とは名のみの道路に車を走らすのは此上ない苦痛であつた。それでも県道もない自動車もない宇検方面とすれば、どんなに喜界島が進んで居るかが判った。途中野飼の馬の数多き事と甘庶畑の多い事、山の形の一寸風変わりな点などは殊に気を引かれた。

阿伝へは夕方の六時半頃、喜界島一帯に凄い夕立ちの降りしきる頃ついた。早速、自称アチツクミュージアム喜界島出張所たる氏の宅へ落ち付く。

夜は静寂なる孤島の地に俊寛僧都初め島流しにされた古人達の昔を偲びつつ岩倉さんと積るアチツク話と喜界島の話に花を咲かせて時の立つのも忘れて語り合ふた。

いろいろの調査も予定通り進行するし農業日記や食物日記を書いて居る人々も熱心にやつて居るとの事だつた。この九月からは島の年中行事も頻りに催されるし又いよいよ一ケ年間の締くくりをする大切な時期にも入つて来るから有らん限りの精力を集中してすべてに大馬力をかけてやつて見ると云ふことも話された。翌日は朝から阿伝の部落を見廻り二十三日は切なる引止めを断つて大島へ帰つて来た。翌二十四日から喜界島は台風襲はれたのであつた。

（「アチツクマンスリー」第十五号一九三六年九月十五日刊 所収）